

はじめに

私は今年で73歳。教員を退職して13年になります。

小学校3年生で終戦。食糧難時代の買い出しの思い出、終戦直後の混乱した、しかし活気のある闇市の生活。中学から高校にかけての闘病、いろいろありました。

私が自分自身の生活を切り拓いていったのは教員になってからです。

川崎の北のはずれ、稲田地区の菅(多摩区)。多摩川と読売ランドに挟まれた梨畑の中に菅小学校はありました。そこが私の教師生活の出発点でした。教員仲間にも恵まれ、共に学習し合い、励まし合いながら一人前の教師として育てられました。菅小学校での14年間、教師として目覚め、私を育ててくれた、子ども、親との出会い、川崎算数・数学サークルの結成。その中で、私は子どもと授業を楽しめるようになっていきました。

①「時間の授業」

②「男から女が引けるか」

③「5・2進法のひき算の授業」

これは菅小学校での実践です。

『はみだっ子が笑った』(あゆみ出版)は、先輩の糸井秀夫さんと出版した菅小学校生活のまとめとなりました。

菅小学校の次の勤務校は、東横線元住吉駅の近くの木月小学校でした。

私はここで17年間過ごしました。菅小で築いた土台の上に充実した実践を積み重ねました。学習日記の実践、輪ゴムで倍のイメージを、分数のかけ算、わり算の授業、赤飯づくりの授業などを子どもと楽しみました。いじめ問題も子どもたちと一緒に立ち向かいました。職場の女性教師3人と『いじめを発達のバネに』(あけび書房)にまとめました。

それから「川崎算数・数学サークルの40年」、「お母さん算数教室」を全県に広げる運動にも参加しました。

もう一つ、胸躍る集団遊び「島から島へ」を子どもたちと完成させました。

最後の3校目は小倉小学校。新川崎駅の近くでした。6年間、障害児学級を担任しました。人間とは何か、物事の分かり方、人間としての誇りや心の動きについて子どもたちから教わりました。子育てに立ち向かう親の心の深さを感じ取ることができました。

障害児学級で教えたあきさんが、結婚しました。

先生、お元気ですか。あきはとても元気です。保育園での仕事をしながら大沢家で少しだけ主婦しています。2人で助け合ってがんばっていきます。

あきあきがお嫁に行くなど考えてもいませんでしたが、本人たちの努力と皆さんの協力、援助などあって何とか小さいときからの夢がかないました。

高校の同級生で同じ病のある方です。

これからは私たち4人の親たちで2人を支えていこうと思います。

2人のお礼の気持ちの品とカレンダーを送ります。

私はこの10年、知的障害の方たちの働く施設で働いています。カレンダーはここでの活動で製作したものです。主人も退職後福祉の仕事をしています。弟の岳も福祉を学び、今は保育士を楽しそうにしています。

この手紙は、わたしを励ましてくれる便りでした。おかあさんも、大企業に勤め単身赴任を繰り返していたおとうさんも、弟の岳さんもあきさんを支える生活に切り替えていったのです。私はその過程をよく見てきました。

私はここ数年、ふさぎ虫におそわれて気力をなくしています。

「万緑や老い深まりて尚歩む(秀夫)」

糸井秀夫さんに励まされて、やっと、自分の教育実践を振り返ってみる気になりました。

「川崎算数・数学サークル」の会員であった北穂さんから手紙をもらいました。

北穂さんは元気はつらつで、青少年海外派遣隊でホンジュラスの小学校で3年間、教員もしてきました。しかし、40歳になったばかりの彼女が元気をなくしているのです。5、6年生を担当して、親の生活苦を背負った子どもたちの心のすさみに苦しんだようです。

「『川崎算数・数学サークルの40年』ありがとうございました。前はこんなに勉強していたんだ…と、今の状況と比べてしまいました。正直、あの頃、サークルで勉強したことを貯金にして、今はその貯金をとりくずしながら日々をただ過ごしている感じです」と訴えていました。

教師の40代は働き盛りです。その彼女が苦しんでいる。今日の教師の置かれている、どうしようもない閉塞した一端の現れだと思います。

教師は子どもと授業を楽しんでこそ元気になれるのです。

「ふさぎ虫におそわれて気力をなくしていた」私が子どもと楽しんだ授業を思い浮かべると元気を取り戻すのです。もう何十年も前の私の実践が生き生きと私の心の中に再現されるのです。糸井さんに励まされて、私が子どもと楽しんだ授業の実践は古くなっていないと気づきました。

年賀状を整理していて教え子の篠原三佳さんの文が目にとまりました。

「覚えていらっしゃるですか。菅小1、2年でお世話になりました。

先生はいつまでも私の先生で、小学校のときの事、とてもなつかしく思い出します。楽しかった授業、おぼえていま

す。私は今、自分の道さがしをがんばっています。一年よい年にしてください」

第1章1「男から女がひけるか」のときの子どもです。大人になっても、小学校1、2年生の授業を楽しかったと覚えていてくれる子がいる。私には大きな励ましです。

北穂さんの手紙を読み、生気を失っている今日の教師に、私が子どもと楽しんだ授業の実践を読んでもらいたいと思ふようになりました。そして、今日の父母にも授業の楽しさを分かってもらいたい、今日の教師と一緒に授業のありようを追求する中で、今日の学校教育のありようを考えてほしいと思ふようになりました。

こういう思いを今日の教師に少しでも伝えられればと思つて、私が子どもと楽しんだ授業実践に焦点を当ててまとめる気になりました。

子どもと楽しむことのできた授業の特徴は何であったかを考えてみました。

- ①イメージをもてる工夫をする。
- ②できるだけ実験を取り入れる。
- ③子どもが自分でやってみることができるように授業を組み立てる。
- ④対立意見を出し合えるように授業を組織する。

この4点が特に重要であることに気がつきました。

- ⑤目で見て分かること。
- ⑥目で見ただけでは分からない。人間の知恵を通して分かること。
- ⑦学習することの意味をきちんと教える。
- ⑧子どもの認識過程を推理して授業を組み立てる。
- ⑨教師の教材観を洗いなおす。

教師自身がよく分かってないことは教えられない。

【時間とは何か】【一日の時間の始まりはどこか。終わりは?】【倍とは何か】など、教師自身が分かってないことがたくさんあります。

【たかが10までの数、だれでも教えられる】と、どの教師も思っているでしょう。

しかし数のイメージを形成することの大切さを認識していない教師にとっては易しいことではないのです。

障害児学級を担任していたときのことです。私はダウン症の潤さん(詳しくは第1章の参考文献)を3・4年と担任しました。その後、潤さんの5年生を担任した先生に、私は潤さんの指導記録や私の指導理論(5・2進法の加減)を渡しました。潤さんを指導しているところも見せました。しかし、その教師は潤さんにたし算を指導しようとしてもうまくいきませんでした。

「もう、頭にきたわ。私のことを馬鹿にしている」と怒る始末です。潤さんを6年生で担任した教師もうまく指導できま

せんでした。

潤さんのお母さんは切ない思いをしながら、「家でも算数の勉強はしなくなったけど、先生にもらったフラッシュカードは潤の宝です」(10までの数、たし算、ひき算のカード)と言 ってくれました。

サークルに来ていて障害児学級を担任していた岩沢さん、福井さんは自分でも工夫しながらイメージを育てる学習を実践していました。潤さんの資料も読んでうまく指導できた と言っていました。

⑩教師も「目からウロコが落ちた」ような、体験を。

「百分率の問題が、母親自身にはっきり分からず、子どもの質問に困っていましたのに、今日のはじめてよく分かりました。まるで目からウロコが落ちたみたいに明らかになり、子どもたちも、このように教えていただいたら、苦労せずすんだのにと思いました」

鎌倉の【父母と教師で学ぶ会】で初めて実験を取り入れ、食塩水を作り、食塩水の濃度を考えたときの、親の感想です。

⑪いじめですさんでいる6年生のクラスでも、分数の乗除の授業は楽しめました。しかし、1年生の【男から女がひけるか】や【5・2進法のひき算】のクラスと6年生では授業の質が違うことに皆さんも本文を読んでもみると気がつくでしょう。1年生のほうが授業の質が高いのです。授業を楽しむ深さが違うのです。

⑫【授業は楽しいね】と子どもと共感できるためには教師自身の自己変革が必要なのだと思います。それは一人では難しいと思います。お互いに教育実践を磨きあう仲間が必要です。

私は、菅小学校でも、木月小学校でも、そういう教師仲間がいました。教職員間で子どものこと、授業のことを話し合える雰囲気がありました。

木月小学校での、ある夏休み前の分会会議(教職員組合)で、みんなで、夏休みの宿題として、次のことを考えあうことにしました。

「子どもが生き生きとしているときはどんなときか」

9月の分会会議でいろいろ意見が出ました。

その中でみんなが一番共感できたのは、30代の女教師の沢田さんが言った次のことばでした。

「私が疲れていず、元気なとき、私のクラスの子は生き生きしているように思う」

今日の教育現場ではこういう教職員間の話し合う関係が影を潜めているようです。なぜなのでしょう。

この本は、私の37年間の教師生活の中で教育雑誌や単行本に発表した原稿を選び、新たに書いたものを加えて編集したものです。以下に、それぞれの初出を示します。

第1章

- 1『はみだしっ子が笑った』1977年、あゆみ出版
- 2『1997年川崎市障害児教育研究紀要』
- 3『数学教室』1974年、国土社
- 4『算数教育』1979年、明治図書
- 5『授業づくりネットワーク』1988年、学事出版
- 6『算数教育』1978年、明治図書
- 7『すべての子どもに学力を』1978年、日本標準
- 10 12 13『「倍」と「単位当たり量」の指導』1990年、あゆみ出版
- 11『算数教育』1974年、明治図書
- 16『イメージづくりが勝負の算数指導のポイント』1995年、草土文化

第2章

- 1『いじめを発達のバネに』1985年、あけび書房

第3章

- 1『集団思考を促す教科の発問』1981年、明治図書
- 2『子どもと教育』1982年、あゆみ出版
- 3『はみだしっ子が笑った』1977年、あゆみ出版